



フランス語のツボ 日本語のツッコミ

2つの言語の“感覚のズレ”から文法を知る旅

中村 美智子



本書は、筆者が制作した YouTube 動画「日本語の視点も交えたく日本人講師ならではの」のフランス語講座」のうち、主に「代名詞」をテーマとした内容をもとに、再構成・再編集したものです。元の動画は、以下の URL からご覧いただけます。

https://www.youtube.com/channel/UCFvrowaOT47GFcfZbQlb_Gw





はじめに

フランス語を学ぶ中で、文法説明を読めば理解はできるものの、その後に「なぜこうなるの?」「わかるけれど、釈然としない」といった疑問が繰り返し浮かび、もやもやがつきまとう——そんな経験はありませんか。例えば、「これを〜」「それを〜」といったごく基本的な表現を使いたいだけなのに、目的語代名詞、指示代名詞、中性代名詞...一体どの代名詞を選べばよいのか迷い、複雑に感じてしまうこともあるでしょう。私自身も学習時代、そのような疑問に幾度となく向き合ってきました。

私は日本で生まれ育ち、海外との接点がない環境で育ちました。大学で第二外国語としてフランス語を学び始めたことがきっかけで、その後フランスの大学に留学し、美術史を専攻し、卒業後は通訳や講師としてフランス語に携わるようになりました。

フランス語との出会いは、外部から与えられたものではなく、私自身の「やってみたい」「続けたい」という思いが出発点でした。家族にフランス語圏の人がいるわけでもなく、配偶者がフランス語圏の人でもありません。おそらく、日本で生まれ、日本語に囲まれて育った大多数のフランス語学習者と同じような動機やプロセスでフランス語を学んだのだと思います。だからこそ、日本語を母語とする人が抱く疑問や違和感にも敏感でいられたのかもしれません。

私は「語学は慣れ」と声高に主張する姿勢を好みません。慣れは確かに大切ですが、それは学習の結果であり、知識をきちんと咀嚼し、自分の中で消化してこそ意味があると考えています。教える立場になってからは、「慣れですから」という言葉をできるだけ使わず、日本語話者がつまずきやすいポイントをできるだけ丁寧に言葉で説明するよう心がけています。その一環として始めたのが、「日本語の視点を交えたフランス語講座」です。動画の限界を補うため、「文章として残してほしい」という声を受け、このたび書籍としてまとめることにしました。

本書では、やや偏った(?) となえや解釈も交えつつ、「なるほど」と感じていただけるヒントをお届けしたいと思います。フランス語文法について「わかるようでわからない」「もやもやしている」——そんな方に、少しでもお役に立てれば幸いです。どうぞ、最後までお付き合いいただけますよう、よろしくお願いいたします。

中村美智子





目次

- p 6 プロローグ
冠詞を学ぶ前の「頭の準備体操」
- p 12 冠詞の使い分け①
不定冠詞・部分冠詞・定冠詞
- p 22 冠詞の使い分け②
「その」本は **le livre** ? それとも **ce livre** ?
- p 30 il est と c'est どちらも「それはーです」
使い分けの要は「通過儀礼 **c'est** の儀式」その実態に迫る!
- p 44 応用編 ça と le の使い分け
ça と **le** どちらも「それを」、同じでは?
- p 53 今、改めて見直したい ça の用法
いかなる状況下でも、極限まで **ça** を駆使してフランス語会話を乗り切ろうとする逞しきフランス語学習者「**çaviver** (サヴァイヴァー)」に捧ぐ
- p 66 この指示地獄 (?) を乗り越えよう !
ce, celui, ça, cela, ceci, celui-là, ceux-ci...
一体何通り「これ」と言えば気が済むのか?
- p 75 中性代名詞 en
なぜ、わざわざ主語と動詞の狭い間に入り込むのか?
- p 92 中性代名詞 y
「超圧縮型」! 一文字だけの代名詞
- p 111 目的語代名詞
この妙な語順の掟は何!?めざせ!スピリチュアル文法!
- p 132 余談考察
なぜ、フランス語では年末も年始も **Bonne année** ! でよいのか?



本書を進めるパートナーたち

本書では、オリジナルキャラクターとともに各章を進めていきます。文法の複雑さや発音の難しさにぼやいたり、「なるほど、そういうことか」と納得したり…。学習者の気持ちを代弁するような存在として、読者と一緒にフランス語の世界を旅するパートナーです。リスのキャラクターは、さまざまなポーズで登場しますので、その表情や動きにもぜひ注目してみてください。

【デイスリス君】

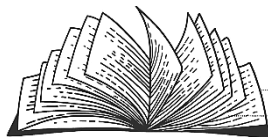


フランス語学習者がふと思ってしまうこと——「ここが奇妙だ!」「これは面倒くさい!」「なんでこうなるの?!」——を代弁してくれる、ちょっぴり不平不満(デイスリ)気味なリスのキャラクターです。発言とは裏腹に、心の中はフランス語への愛でいっぱいです。

【マダム中村（筆者）】



デイスリス君のつぶやきや疑問をやさしく(ときに鋭く)受け止め、落ち着いて答える…はずの筆者。筆者もまた、心の中はフランス語への愛でいっぱいです。



冠詞を学ぶ前の 「頭の準備体操」 プロローグ



フランス語の冠詞が多いのは、なぜ？

まず、冠詞の学習に入る前に、名詞の捉え方におけるフランス語と日本語の違いについて確認しておきましょう。

フランス語には、冠詞や指示形容詞など、名詞の性数や文脈上の特性を示す役割を持つ要素が多く存在します。例えば、不定冠詞（un, une, des）、定冠詞（le, la, les）、指示形容詞（ce, cette, ces）といったものです。

それに対して、日本語ではそうした要素が名詞に逐一付くとは限りません。さらに、日本語では名詞そのものを何度も繰り返さなくても、省略したままコミュニケーションが成立することもよくあります。話し手と聞き手が目の前で同じものを見ている場合や、目の前にない場合でも、双方がすでに認識、理解している内容であれば、代名詞にさえ置き換えず、その名詞に一切触れずに話が進むことがあります。それでも意思疎通ができるのは、日本語が、あえて説明しなくても分かり合える仕組みの言語だからです。





面白がりポイント

つまり、日本語とフランス語では、「どのようなことを、どの程度詳しく伝えるべきか」という点において、重視される要素が大きく異なります。このような違いには、もちろん文法的な要素も関係しており、フランス語と日本語ではそれぞれ異なる形で組み込まれています。そうした違いについて、あらかじめ「そもそも違うのだから」と心の準備をしておけば、フランス語の文法に対して「これは何だ？」と嫌気がさすことも減るのではないのでしょうか。

こういったフランス語特有の性質や日本語との違いは、私自身『面白がりポイント』と呼んでいます。この『面白がりポイント』は、積極的に楽しんだ者が勝ちです。文法の違いを通じて見えてくる両言語の考え方の違いは、非常に興味深いものです。ぜひ、ためらわず、嫌がらず、こうした違いを通して新しい世界を発見してください。

フランス語と日本語、比較してみると？

このようなことを念頭に起きつつ、フランス語の冠詞の具体的な役割について見てみましょう。以下の日本語の会話をご覧ください。これは、レモン味とチョコ味のビスケットについての会話です。

A：「レモン味かチョコ味、食べる？」

B：「うん、レモンのを、ちょっと。」

A：「自分で作ったの。結構パリパリかも。」

B：「硬いの好き！あ、これ本当においしい。」

では、これをフランス語にすると、どのようになるでしょうか？

A : Tu veux des biscuits au citron ou au chocolat ?

B : Oui, je veux des biscuits au citron, s'il te plaît.





A : Ce sont les biscuits que j'ai faits. Ils sont peut-être assez croustillants.

B : J'aime les biscuits durs ! Ah ! Tes biscuits sont vraiment délicieux !

両者を並べて比較すると、文字数や話量において圧倒的な違いが見られます。このフランス語を、あえて不自然な直訳で日本語にしてみます。

A : 君はレモン味かチョコ味の不特定複数のビスケットを欲しい？

B : ええ、私は不特定複数のレモン味のビスケットが欲しいわ。

A : これらは「私が作った」という明確な特徴を持つビスケットで、それらは結構
カリッとしているかもしれない。

B : 私は、総じて硬いビスケットというカテゴリーに属するところのものが好きよ。

君の複数のビスケットは本当においしいわ。

下線部分は、フランス語における冠詞を直訳したものです。例えば、数回登場する「ビスケット」は、同じ単語であっても、フランス語では冠詞や所有形容詞によって、文脈ごとに異なるビスケットの特性が表れます。

- 「不特定複数のビスケット」を指す場合
- 「自分が作ったビスケット」という限定性を示す場合
- 「ビスケットという菓子の総称」を指す場合

同じ「ビスケット」という名詞であっても、場面ごとに異なる冠詞が付くことで、その名詞の属性や捉え方が変わります。一方で、日本語では「ビスケット」という言葉が必ずしも使われない場合もあります。例えば、話し手と聞き手の間にビスケットがあれば、「ビスケット」という単語を繰り返したり代名詞で置き換えたりしなくても、会話が成立するのです。このような違いが、日本語とフランス語の間には存在します。



ローコンテキスト？ ハイコンテキスト？

では、なぜフランス語にはこれほど多くの種類の冠詞が必要なのでしょう？その理由は、フランス語が「状況を共有していない人間同士が言葉を使って意思や意図を伝える」という前提に基づく言語だからです。つまり、会話を成立させる双方は、あらかじめ共有できる背景を持たず、互いの言い分をゼロから理解し合うことから始まります。そして、その名詞が何であるか、またどのような属性を持っているのかを逐一明確にする必要性が生じます。冠詞は、各語の属性を明確にし、補足的な説明を行うために存在する仕組みなのです。

このように、具体的に説明し、言葉を尽くして伝えることが重視される文化的背景は、ローコンテキスト文化（Low-Context Culture）と呼ばれています。

フランス語は
「ローコンテキスト文化の言語」
曖昧さ 許すまじ の言語

状況を共有していない人間同士が
逐一言葉で伝える、という前提

↓

共有していない相手に意図を理解してもらうためには、
より多くの言葉が多く必要

↓

名詞の属性や特定性など
補足情報を明確に伝える様々な冠詞が必要



一方で、日本語はハイコンテキスト文化（High-Context Culture）に属する言語です。すでに状況を共有している前提のもと、未知の部分だけを補足することで意思疎通が可能になる仕組みになっています。



ちなみに日本語は
「ハイコンテキスト文化の言語」
行間を 読みまくれ の言語

互いが知らない未知の部分や事柄だけに
焦点を当て、それを伝えれば伝達できる

だからクッキーの会話なのに
「クッキー」という言葉が一度も出てこなくても成立する





冠詞の役割

フランス語における冠詞の重要な役割は、名詞に関する補足情報を聞き手や読み手に正確に伝えることです。具体的には、以下の点を明示する役割があります。

☞ 単数？それとも複数？

名詞には基本的に単数形と複数形があります。複数形には *-s* が付きますが、発音はされません。そのため、単数形と複数形の違いを音声だけで判別する際、un livre か des livres かは、冠詞の発音の違いによって区別できる仕組みになっています。

☞ 男性名詞？それとも女性名詞？

男性名詞と女性名詞の区別は、冠詞によって示されます。名詞の性（男性名詞・女性名詞）はフランス語の文法において非常に重要な要素であり、形容詞や動詞の活用、さらには名詞以外の文法事項にも大きな影響を与えます。そのため、名詞の性別を明示することは極めて重要です。

☞ どの意味で？一つの単語が持つ意味の幅広さ

フランス語の特徴の一つとして、総語彙数は少ないものの、一つの単語が持つ意味の多様さが挙げられます。

- ① フランス語では、一つの単語が複数の異なる意味を持つことが多々あります。
- ② 発音やスペルが同じでも、名詞の性が異なり、意味も異なる単語が一定数存在します。
- ③ 単数形と複数形で意味が変わる単語も一定数存在します。

②および③については、冠詞によって名詞の性と数に関する正確な情報が示されないと、正確な意味を把握できません。





以下に例を挙げます。

【mémoire】

Chercher ce mot dans la mémoire la mémoire (女性名詞) は「記憶」

→ その言葉を記憶の中で探す

Chercher ce mot dans le mémoire le mémoire (男性名詞) は「修士論文」

→ その言葉を修士論文の中で探す

【parti, partie】

C'est le parti important.

le parti (男性名詞) は「政治の政党」

→ それは重要な政党です。

C'est la partie importante.

la partie (女性名詞) は「パーツ」や「部分」

→ それは重要な部分です。

C'est parti !

parti は partir の過去分詞・形容詞

→ さあ、出発ですよ！

【toilette】

Elle fait sa toilette.

la toilette (単数) は身だしなみ (化粧、洗顔、着替えなど) の行為

→ 彼女は身支度を整えています。

Où sont les toilettes ?

les toilettes (複数) はトイレ

→ トイレはどこですか。

このように、フランス語には名詞の性数が異なることで、大きく意味が変わる単語が多数存在します。

次章では、ローコンテクスト文化に属するフランス語において、さまざまな冠詞がどのように使い分けられているのか、その特徴や役割について考察していきましょう。



冠詞の使い分け①

不定冠詞・部分冠詞・定冠詞



ここでは、前章に続いて冠詞を扱います。不定冠詞、部分冠詞、定冠詞のそれぞれについて説明します。

不定冠詞

不定冠詞は、文脈上で初めて登場する名詞に用いられます。これは、聞き手がまだその内容を知らない場合や、新しい情報や未知のものを指す際に使用されます。不定冠詞は、文脈に応じて単数形または複数形が使い分けられます。また、数えられる名詞にのみ適用される点が重要です。

	単数	複数
男性形	un	des
女性形	une	

「un, une」で性（男性・女性）を、「un, une, des」で数（単数・複数）を判断することができます。

Il a un problème.

彼には一つの問題があります。

Il a des problèmes.

彼には複数の問題があります。

J'achète une jupe.

私は一枚のスカートを買います。

J'achète des jupes.

私は複数枚のスカートを買います。





部分冠詞

部分冠詞は、不可算名詞、つまり数えられないとみなされる名詞に使用されます。男性形と女性形の二種類がありますが、複数形は存在しません。

「いくつかの～」や「ある程度の量の～」というニュアンスが含まれ、特に物質名詞を「ある程度の数量」として示したいときに用いられます。

また、部分冠詞は、勇気 (le courage) や幸運 (la chance) などの抽象名詞にも使用されます。

男性形	女性形
du (de l')	de la (de l')

母音字または無音の h で始まる名詞には「de l'」を用います。

Tu prends **du** café ?

君はいくつかの量のコーヒーを飲むの？ ☞ café は男性名詞、**du** を使います。

Non, je prends **de la** tisane.

いいえ、私はいくつかの量のハーブティーを飲みます。

☞ tisane は女性名詞、**de la** を使います。

Vous mangez **du** poisson ?

あなたはいくつかの量の魚 (= 切り身) を食べますか？

☞ 魚の一部。魚は男性名詞、**du** を使います。

Non, je mange **de la** viande.

いいえ、いくつかの量の肉を食べます。

☞ 肉の一部。肉は女性名詞、**de la** を使います。

ただし、魚を頭からしっぽまで丸ごと一匹食べる場合は、un を用います。その際、entier (全部の、全体の) を付け加えて補足することもあります。





Vous mangez un poisson entier ?

あなたは魚を一匹丸ごと食べますか？



フランスの食文化では、魚は主にフィレの部分だけをいただきます。そのため *manger du poisson* と表します。

しかし、日本には小魚などを丸ごと食べる文化があります。その場合は *manger un* または *des poisson(s)* となるでしょう。このような食文化の違いが冠詞に反映されるのは興味深いですね。

部分冠詞は、母音字または無音の *h* で始まる名詞の前では *de l'* になります。

Il y a de l'eau sur la table.

テーブルの上に水があります。

→ *eau* は母音字で始まる物質名詞で、*de l'* と表記されます。

お金は抽象的な概念として捉えられるため、部分冠詞を使用します。ただし、具体的な通貨の場合には数詞を用います。

Il a de l'argent.

彼はお金を持っています。

→ *de l'argent* は母音字で始まる抽象名詞で、*de l'* と表記されます。

Il a deux mille euros.

彼は 2,000 ユーロを持っています。

→ ユーロや円など具体的な通貨では、数詞と共に表記されます。





いくらかの量って、何？

まるで、曖昧さが、さらなる曖昧さを醸し出しているようで、余計に分かりづらいなあ。

部分冠詞が示す「いくらかの」という量感は、「あえて厳密に測らないけれど、ある程度」という“かたまり感、ざっくり感”を表す感覚的なものと捉えてみましょう。



「数えられる」と「数えられない」の違い

部分冠詞と不定冠詞の使い分けは、文脈によって異なります。

💡 厳密な数量は不明だが、ある程度の量を示す場合

厳密な数量は未定であるものの、ある程度の量を示したい場合、例えばポットに入っているコーヒーやお茶を求めるときには、次のように表現します。

Je prends du café.

私はいくらかのコーヒーを飲みます。

Je voudrais de la tisane. 私はいくらかのハーブティーを頂きたいです。

💡 商品としてのオーダー、注文の場合

しかし、カフェなどの飲食店での注文では、以下の通りです。

Je prends un café.

コーヒーを一杯ください。

Je voudrais une tisane.

ハーブティーを一杯頂きたいです。



注文する際は、du café、de la tisane とは言いません。なぜなら、ここでの café や tisane はどちらも商品であり、可算名詞として捉えられるからです。この文脈では un café は不定冠詞というよりも数詞の機能を持ち、複数では des cafés ではなく、deux cafés、trois cafés と数詞がつきます。

このように、部分冠詞と不定冠詞の違いや使い分けは、文法ルールだけでなく、話の流れや文脈にも関連しています。

☞ 定冠詞

定冠詞は、英語の the に相当します。すでに話に登場した名詞や、特定の範囲や枠内で自明な名詞に使われます。

	単数	複数
男性形	le (l')	les
女性形	la (l')	

単数形は、母音字または無音の h で始まる単語には「l'」に変化します。

☞ 単数形は、母音字または無音の h で始まる単語には「l'」に変化します。

l'avion (その飛行機) l'hôtel (そのホテル) l'homme (その男性)

☞ 複数名詞の les は母音字で始まる単語とリエゾン（音の連結）が発生します。

les hommes [lez_ɔm] (その男性たち) les oiseaux [lez_wazo] (その鳥たち)

☞ 定冠詞が使われる主な場面

定冠詞が使われる場面は、大きく 2 つのパターンに分類されます。





💡 既出の特定物を指す

前の文脈に登場した名詞を指し示す際に用いられます。

Je travaille dans une boulangerie.

私は、とある一軒のパン屋で働いています。

La boulangerie s'appelle « Paul ».

そのパン屋の名前は「ポール」です。

- ☞ 最初の文では、文脈内で初めて登場する「とある一軒のパン屋」として *une* を使用し、次の文では「そのパン屋」と特定されているため *la* に変わります。

Il y a des lunettes sur la table.

テーブルの上に（一双の）メガネがあります。

Ce sont les lunettes de Sophie.

それはソフィのメガネです。

- ☞ 「不特定の誰かのメガネ」である *des lunettes* は、「ソフィのメガネ」と所有が特定されて *les lunettes* になります。

💡 初出でも自明なもの

文脈上で初めて登場する名詞や、話の中で具体的に説明されない名詞でも、その場の状況や前提から「それが何であるか」が明らかな場合には、定冠詞が使用されます。

Le directeur est en réunion.

部長は会議中です。

- ☞ 「一般に通じる唯一のものや役職」、「誰のことかは共通認識によって明らか」とされる場合、定冠詞を使用します。

Le gouvernement est instable.

政府は不安定です。

- ☞ ここでの「政府」は、その国の政府であるという前提が共有されています。



La Terre tourne autour du Soleil.

地球は太陽の周りを回っています。

- ⇒ 天体としての太陽や地球には、唯一の存在として常に **le** や **la** が付きます。
フランス語では天体名は固有名詞として大文字（**la Terre** , **le Soleil**）で表記されます。小文字の「**la terre**」は「大地」、「**le soleil**」は「太陽、日」を意味します。

このように、定冠詞は「特定のものを指す」という役割を持ち、そのものが文脈の中で何であるかを明確に示すために使用されます。

さまざまな冠詞の使い分け

例文を使って、3 つの冠詞の違いを比較してみましょう。

Il y a de la lavande.

いくらかのラベンダーがあります。

- ⇒ 不特定のラベンダーを指すため、**部分冠詞**を使用します。
de la lavande は、不特定で数えられない小さな花の集合体を指します。

La lavande, c'est un symbole du Midi.

ラベンダーは南フランスの象徴です。

- ⇒ ここでは「ラベンダー」という植物の総称を表す定冠詞 **la** を用います。

C'est un symbole du Midi.

これは南フランスの一つのシンボルです。

- ⇒ 複数のシンボルが存在する前提で「そのうちの一つ」としての **un** と表したい場合は、**l'un des symboles** と表すこともできます。
- ⇒ ラベンダーこそが唯一のシンボルであると表したいのであれば、**le symbole** です。



このように、文脈や捉え方（商品か量か、具体的か抽象的か）や名詞の性質に応じて、冠詞を使い分けていきます。



おもわず慄く
デイスリス君

名詞一つに、こんなに色々な冠詞が付くなんて！
ローコンテキスト文化のフランス語の
「曖昧さ、許すまじ」という言語的精神
に、もはや執念に近いものを感じるぞ。

フランス語の冠詞は、言葉に「文脈」や「意図」
を組み込む大切な要素です。
具体的な例文に触れながら、少しずつ感覚を
養っていきましょう。



日本語との比較 日本語の「が」「は」になぞらえると？

参考までに、フランス語の冠詞と日本語の助詞の対応を見てみます。日本語では、初めて登場する名詞に助詞「が」が、すでに登場した名詞に「は」が使われることが非常に多いです。「が」は新情報を示し、「は」は既知の情報＝旧情報を示します。フランス語では、以下の冠詞がこれに対応します。

💡 新情報と旧情報の役割の違い

- 新情報「が」→ 不定冠詞、部分冠詞
- 旧情報「は」→ 定冠詞



あくまで目安ではありますが、このような違いを考慮に入れることで、フランス語の冠詞の使い分けが理解しやすくなるかもしれません。

Une fille regarde le ciel.

女の子 **が** 空を見上げています。

La fille a souri.

その女の子 **は** 微笑みました。

Un chien dort devant la porte.

ドアの前で犬 **が** 寝ています。

Le chien est très grand.

その犬 **は** とても大きいです

このように、冠詞ではありませんが、日本語においても、一音だけで未知の情報と既出の情報を区別できる語が存在するのは興味深いですね。

注意点

ただし、「が＝不定」「は＝定」と、すべての場合において対応させることはできません。ここは注意が必要です。

例えば、フランス語では、「自明のもの」や「社会的に共有されている知識」に対して、話の中で初めて登場する場合でも定冠詞が用いられることがあります。

一方で、日本語では未知・既知にかかわらず、文の主題化や対比、あるいは強調のために「が」が用いられることがあります。したがって、「が＝不定」「は＝定」という単純な図式だけでは、フランス語と日本語の冠詞や助詞の対応関係を正確に捉えることはできません。





La Terre tourne autour du Soleil.

地球 **が** 太陽の周りを回っています。

- ➡ 初めて登場する「太陽」でも 定冠詞の **le** が使用されます。
- ➡ 唯一の存在や共通認識があるものには、最初から定冠詞 **le** が使用されます。

以上、不定冠詞、部分冠詞、定冠詞についての説明でした。それぞれの文脈に応じた使い方を意識することで、フランス語の冠詞に対する理解が深まることでしょう。日本語と比較しながら学ぶことで、冠詞の役割をより明確に捉えるヒントを得られるかもしれませんね。



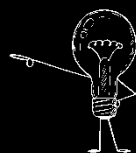
デイスらないときもある
ご機嫌な
デイスリス君



冠詞の使い分け②

「その」 本は

le livre ? それとも ce livre ?



今回も冠詞をテーマに扱います。とくに定冠詞（le, la, les）と指示形容詞（ce, cette, ces）を比較します。指示形容詞は冠詞ではありませんが、名詞の特定性を示す点で冠詞と共通する性質があります。また、定冠詞も指示形容詞も、日本語に訳すと「この／その／あの」となることが多いです。しかし、実際にはそれぞれ異なる使い方をします。その違いについて考えてみましょう。

ここで、以下の例文を比較してみます。「私はその本を探しに図書館へ行きます。」の意味では、どちらを使うべきでしょうか。

Je vais chercher le livre à la bibliothèque.

Je vais chercher ce livre à la bibliothèque.

この問いを考えるにあたり、まず、指示形容詞の用法を確認します。

